水の源

MIZUNOMINAMOTO

2013.2
20

巻頭インタビュー　水源の里へ思いを馳せる

コミュニティデザインで元気を取り戻す

コミュニティデザイナー　山崎 亮さん

フォトストーリー

会津本郷焼

福島県会津美里町

ウォークルポ

ぶどうのまちの新しい魅力
フットパスとかつぬま朝市を体験

山梨県甲州市

水源の里発　おすすめご当地グルメ

和歌山県九度山町　「柿の葉寿司」

宮崎県小林市　「チーズ饅頭」

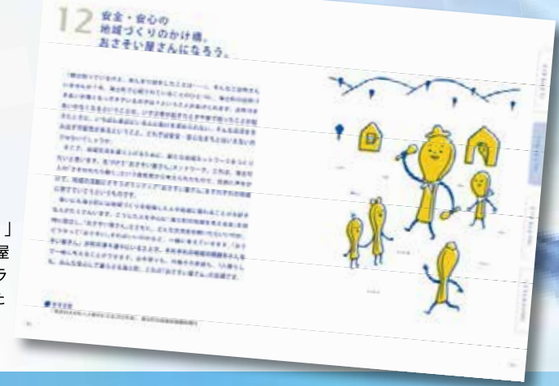
香川県まんのう町
「美霞洞渓谷」

巻頭インタビュー

水源の里へ 思いを馳せる

「上流は下流を思い、下流は上流に感謝する」。
「水源の里」の理念は、双方の地域に住む人たちがお互いの暮らしや環境への理解や感謝が通い合ってこそ実現します。
このコーナーでは、文化人・著名人に、
そうした「水源の里」にまつわるお話をうかがいます。

聞き手：『水の源』編集長　町井 且昌
京都造形芸術大学にて



「10人でできること」のひとつ、おさそい屋さんになろう。キャラクターの顔は提案した住民に似せてある

総合振興計画の別冊『海士町をつくる24の提案』住民がまちづくりに関わるための具体的なアイデアを、実行する人数別にまとめた

コミュニティデザインで　元気を取り戻す

山崎　亮さん

人と人をつなぐ

―― 最近よく耳にする「コミュニティデザイン」とは？

コミュニティが抱えている課題をそこに所属している人たち自身の力で乗り越えていくためのお手伝いをすることだと考えています。その前に、コミュニティとはなにかというと、社会学では「同じ地域に住んでいる人」というのが前提だそうです。最近はFacebookやサークル、会社組織もコミュニティだと言われますね。僕は集落や自治会だけでなく、こういうものも全てコミュニティと捉えています。

―― 今なぜコミュニティデザインなのでしょう。

今まで地域で集まってやってきたことを、どんどん人の手に任せるようになったということが背景にあります。例えば、冠婚葬祭を業者に任せるようになりました。歴史的には、特に戦後ＧＨＱによって五人組、町内会などの地縁型のコミュニティが解体されたのは大きいと思います。福祉は社会福祉法人に、教育はＰＴＡに任せて、婦人会、子ども会……とばらばらになったことで、自分たちの力で地域をマネジメントしていくのは難しい状態になっています。そこで、なんとかコミュニティをデザインし直して元気にしないといけないと思いました。

―― プロジェクトは実行段階になると手を離されますね。

そうですね。少し詳しくお話しすると、まずプロジェクトごとに事務所（studio-L）のスタッフ何人かを担当に決めます。最初のうちは僕も一緒に行きますが、徐々にスタッフに任せます。１年たったら３人のスタッフが２人になったり、１人になったりする。我々ができることはどんどん住民の人たちに伝えます。気が付いたら「あの人たち最近なんにもやっていないよね（笑）。でも自分たちで出来ているからいいじゃない」という状況にもっていくように心がけています。

「思い」で集まった住民と集落支援員がまちづくりの担い手に

―― 島根県の海士（あま）町では総合振興計画のお手伝いをされましたね。

はい、町長に呼んでいただきました。ですが、我々が計画を作ってぽんと渡すのではなく、住民に作ってもらおうと考えました。本当の目的は、これをきっかけに集まった人たちを良質なコミュニティに変えて、自分たちの手で町づくりを始めるための土台をつくることでした。各集落にはまだ人のつながりが残っています。裏を返せば結構しがらみもあるということですね。だから、役職ではなくて「総合計画に興味がある」「これから島の未来をこうしていきたい」という「思い」で集まってくださいと声をかけました。そして、集まってくれた100人を興味ごとに分け、「ひと」「暮らし」「産業」「環境」の４チームができました。唯一の約束は「言ったからには何か関わってくださいね」ということ。自分たちができることから発信して、どうしてもできないところを行政にお願いするという、提案型で話し合ってもらいました。そうすると計画書ができたときには、自分たちが何をすべきかが決まっていました。暮らしチームはイベントに高齢者を誘い出す「おさそい屋さん」を始めましたし、環境チームは日本名水百選をもつ全国の自治体が集まって行う「名水サミット」を成功させました。特筆すべきなのは、総合計画書が出来た後に４つのチームが即座に動き出したことですね。

―― 今も各チームの活動が続いているんですね。

そうですね。ただ、海士町も同じですが、水源の里で活発に活動できる人は人口の一割もいないと思います。今では300人が関わっていますが、残り2,000人はぜんぜん参加しません。2010年

1973年愛知県生まれ。大阪の建築設計事務所でデザインとマネジメントを学んだ後、2005年に独立しソフトに特化した㈱studio-Lを設立。丁寧なヒアリングで地域の魅力やニーズをあぶり出し、人と人をつないで解決策を探る。「情報大陸」（ＴＢＳ系）でその仕事の一端が放送され、一躍時の人となった。studio-Lが携わるプロジェクト「第四次海士町総合振興計画　島の幸福論」、「マルヤガーデンズ」、「震災+design」ではグッドデザイン賞を受賞した。2011年度より、京都造形芸術大学教授および空間演出デザイン学科長に就任。著書に発行部数２万部を突破した『コミュニティデザイン 人がつながるしくみをつくる（学芸出版社）』、『まちの幸福論　コミュニティデザインから考える（ＮＨＫ出版）』などがある。

からはこの2,000人の方が気になりました。まずは集落を回って高齢化率や子どもの数、病院までの距離などを調べました。日常生活はうまくいっているか、自然環境は維持管理できているかなども聞いて、集落の客観的な条件の厳しさと生活の満足度を把握しました。中には高齢化率が高くて学校も病院も遠く、客観的にみて住環境は恵まれていないのになぜか本人たちはものすごくやる気がある、という集落がありました。数値的に言えば限界集落でも、住民にやる気さえあればぜんぜん限界じゃない。逆もあります。客観的には恵まれているのに本人たちは「もうだめだ」と思っている。これはもったいない。この人たちのやる気を上げることが大事になってくるので、一つひとつ集落を回っています。「これだけ条件が恵まれていれば、もう少しこういうことができますよね」っていう話し合いをするワークショップを進めているところです。

―― 海士町では集落支援員制度*1を活用していますね。

6人の集落支援員とともに活動しています。最年長でも46歳と若く、うちのスタッフ1人を加えた7人で14集落を見ています。集落支援員制度は新しくできた仕組みなので、データの解析やファシリテーション*2、情報発信の方法が分からない、支援の仕方が分からない人たちが活動しているという問題があります。自治会長や行政のOBがやっていて、今までのやり方と何も変わっていないことが多いと聞きます。海士町の6人には、役場の若手職員と一緒に一週間、コミュニティデザインに関する研修を受けてもらいました。後の段階で職員と連携が取りやすくなると考えたからです。

今は集落支援員の起業に取り組んでいます。海士町の集落支援員はみんな開業届けを出していて、個人事業主になっているんですよ。古物商の免許を取ってもらい、修理講習会もしたので、ちょっと壊れた家具は修理できます。集落を回って、持って帰っていいと言われた食器や家具を引き取って再生し、「古道具カフェ」というかわいい雑貨屋で販売しています。集落に足を運び支援すれば支援するほど仕入れができる。総務省の集落支援員制度としてではなく、雑貨屋の収入で生計を立てる、という仕組みへ徐々に変えていっています。

左：雑貨屋は保育園跡地を利用している
下：集落支援員が集めたレトロな雑貨が並ぶ店内

※1　集落支援員制度

集落を元気にするためのノウハウや知見を持つ人材が地方自治体からの委嘱を受け、市町村職員と一緒になって、集落への目配りをする。総務省が2008年度に創設した制度。

※2　ファシリテーション

話し合いの場を円滑に進めるための手法。参加者が発言しやすい雰囲気をつくったり、参加者同士が協力しやすくなるゲームをしたり、発言した本人が気づいていなかったような意見を引き出したりする、コミュニティデザインの現場で重要なスキル。

ヨソモノであることに価値がある

―― 水源の里に暮らす人たちが山崎さんのようなアドバイザーを迎えずに、自分たちでやっていく方法もあり得るでしょうか？

新しい時代に敏感であること。一世帯一票制の会議ではだめ。女性や若い人が出てくる機会が必要。自由に発言できる雰囲気を作る。この様なことがらを分かっている長老がいること。なおかつ、それに呼応して、若い人たちが「我々に任せてください！」と言う状況がある。その条件が揃っていれば、外部の人が入らなくてもうまくいくと思います。ただ、ほとんどの集落はそうなってないので難しいと思います。

―― Iターンの人が「郷にいれば郷に従え」で慣れていくか、諦めて出ていくか、両極端になってしまう。いい距離を保ちながらやっていくというのは難しいでしょうね。

そうですね。距離を保っていたら、集落の中では生活できないでしょう。我々ヨソモノが強いところは、この2人は馬が合わないと分かっていても、ワークショップで出てきたアイデアの付箋を引っ付けて「これ一緒じゃないですか」と言えるところ。僕らになにか能力があるわけではなく、ヨソモノであること自体が価値を持っていると思います。だから僕が今住んでいる町でコミュニティデザインを頼まれたら、日本で一番やりにくいですね（笑）。

―― ヨソモノだからできると。

コミュニティデザインでは、みんなの意見をどんどん聞いて「言ったからにはやってくださいね」っていう関係を作らないといけません。こちらが答えを出したら「はぁーそうですか。じゃ、先生やってください」になってしまいますから。これを逆転するには、調べつくして行っちゃいけない。つまり、話を聞くためにワークショップをやるんです。地域に行くと僕の父親とかおじいちゃんの世代の人たちと話をしますから、そこで知ってるのに知らないふりをしたって絶対バレます。

―― 先生として来るよりは、「教えてください」という姿勢の方が受け入れてもらいやすいでしょうね。

そう。だから大学の教員の名刺は配ったことがないです。どこの誰かわからない坊主のヒゲ面としていたいな、と思いますね。

―― いわゆる限界集落について、「撤退するという方法もあるのではないか」と著書にありました。

はい。全国的に人口は減っていくので、集落を閉じることも考えておく必要があります。集落の状況を把握し、住民が集落の将来を語り合う。活性化したいのか、閉じるのか。重要なのは住民の意思です。我々はその方法を一緒に考え、お手伝いしたいと思っています。

―― 東京も含め、人口が減ったときのことを今から考えておかなければとおっしゃっていますね。

中山間離島地域は、一番早く人口減少の課題が出ている人口減少先進地です。既に数十年も直面する課題に対応してきている。僕が教わることもたくさんある。ここで画期的な方法を生み出すことが出来れば、10年後、20年後にまねしたい地域が日本にはいっぱいあると思います。僕も皆さんと一緒に活動できることを楽しみにしています。

インタビューを終えて

京都の市街地を見はらす北白川の京都造形芸術大学でお話をうかがいました。たっぷり1時間半、次から次に飛び出す話題にすっかり引きこまれました。先生の新刊本の帯には、「カラダとアタマで本当のつながりをつくる」とありました。

Close up

山崎亮さんの書籍

『コミュニティデザインの時代
自分たちで「まち」をつくる』
中公新書（903円）

毎月10回ほど行う講演会で出た質問をベースに、「なぜ今コミュニティが注目されているのか」、「つながりのデザインとは何か」、「コミュニティデザインの進め方」などがまとめられている。コミュニティデザインの第一人者が、プロジェクトに関わった動機や背景、コミュニティデザインの方法論を明かした一冊。

Photo Story フォトストーリー

水源の里には、様々な文化や伝統行事が残されています。
このコーナーは、多くの先人によって継承されてきた匠の技を全国の皆さんに紹介します。
今回は東北最古の焼き物の産地、福島県会津美里町を訪ねました。

日々の器に五感の美を求めて

会津本郷焼

福島県会津美里町

8代目の最新作。「柿の蔕茶碗」

宗像窯の8代目当主・宗像利浩さん

会津は広大な水源の里

郡山を発ったＪＲ磐越西線は、ゆったりと丘陵地を登って行く。会津若松を目指して……。猪苗代町、磐梯町を経るにつれ夕闇が迫る。吹雪も烈しさを増し、いよいよ視野は狭くなっていった。かつて会津の地は「四面山獄」と称された。言い換えれば山紫水明の地であり、丘陵や傾斜地を擁した一大水源平野なのだ。訪れようとする焼き物のまち・会津美里町も、その一角を占める水源の里だ。まちの東を貫流する阿賀川（通称：大川）は、田畑を潤しながらその名に一字を加え、阿賀野川となって越後平野から日本海へと流れくだる。ＪＲ只見線に乗り換え、会津本郷駅で下車。例年より早く大雪に見舞われた12月10日、今夜からお世話になる割烹旅館・吉田屋の女将が迎えてくれた。

会津本郷焼の「宗像窯（むなかた）」を訪ねる

「おはいなんしょ」の暖簾に誘われて、名品の数々が整然と配された和風の広い客間に上がった。町役場のまちづくり政策課係長の渡部雄二（わたなべゆうじ）さんも一緒だ。掘り炬燵に入り対座した宗像窯の8代目当主・宗像利浩（としひろ）さん（55歳）は、柔和な面立ちに厳しさを秘めた、いわゆる好漢である。宗像窯の先祖は宗像大社（福岡県）の布教師だ。奈良時代（767年）に会津本郷町に移り住み、後に焼き物の技を習得し広めていったとのこと。こんな、とてつもなく長い歴史に裏打ちされている技を「受け継ぎ伝えたい」という利浩さんの言葉は、ものづくりへの深い気概として心に響いた。

ご本人は「京都・嵯峨の大学で2年間陶芸を学び、長男なので、なんとなく後継ぎにと思っていた」とさらっと言われた。しかし、素人で門外漢の私には察しようもない、紆余曲折を経て8代目を襲名されたのだと思う。それは50歳の時であったという。

利浩さんからは多くの想いをいただいた。「作品は焼きあがりの段階では表面の色や形は見えますが、なかなか本質を見せてはくれません。本物は一見平凡に見えるものです。そこで本質を見抜く目が要求されるのです。日々の器といえども、本質のよい作品を選んで、器の中にひそんでいる美を五感を通して発見し、育てることが大事です」。無粋な私は彼の一つひとつの言葉にドギマギする。

客間に展示されているたくさんの陶器。どれを撮らせていただこうかと迷っていると、黒っぽい茶碗をひとつ、最近の作品として手渡してくれた。「柿の蔕（へた）茶碗」と名付けられたその器は、何の変哲もない茶褐色で、ざらっとした土の感触を残したままの品。思わず「縄文か弥生時代のモノの様ですな」と言ってしまったが、彼は微笑むばかり。しかし、ひと言「質素に」と声にされた。数多くの陶器のうち、撮影したのは「柿の蔕茶碗」ひとつのみという羽目になった。

再生された登り窯

宗像家居宅のすぐ傍の丘に雪を踏みしめ登ると、突如、長大な建物に直面した。中に入ると、これぞまさに登り窯！ その巨大さに圧倒された。35度の急斜面に、幅5ｍの7つの窯が連なる。全長20ｍにもなる大窯だ。

先導してくれたのは、9代目の利訓（としのり）さん（28歳）。彼も京都・南丹市の専門学校で2年陶芸を学んだのち、島根県で修行し、家業に入った。宗像窯に雇い職人などいない。いわば「一子相伝」の世界だ。父親ゆずりの言葉少なで穏和な人当りが好ましい。

2011年3月11日の東日本大震災は会津をも襲った。江戸中期に作られた東北最古の

客室の玄関口にかけられた暖簾「おはいなんしょ」と招いてくれる

会津美里町紹介

福島県の西部に位置し、東は会津若松市と接する。平成17年に3町村が合併し、面積276km²、人口約22,800人の町である。高齢者比率は31.7％。豊かな森林、良質な土と水に恵まれた農業中心のまち。本郷焼のせと市は8月第1日曜日の早朝4時から開催され、人気を呼んでいる。

再生された登り窯の前で。9代目(左)と8代目（右）

陶器用の土を採った向羽黒山への登り口

磁器や碍子の原料となる石の採掘山。郊外の田んぼの中に屹立している

この登り窯も、下部2つの窯と火を入れる「大口」が崩壊した。爪跡は深く、再建も危ぶまれた。しかし、日本工営グループの大塚孝義さんが「宗像窯登り窯再生プロジェクト」を立ち上げ、多くの人々の支援により修復された。点検を重ねながら2013年5月に再び火入れとなる。窯の前に立つ父子も喜びを隠せない。

宗像邸と路地を挟んで常勝寺がある。その境内の陶祖廟には、陶祖･水野源左衛門と磁祖･佐藤伊兵衛が祀られている。2人の開祖から始まり、戊辰戦争（1868年）、本郷大火（1916年）による壊滅的な状況も乗り越えた会津本郷。今も数多くの窯元が集中する焼き物の里に、復興を告げる紅蓮の炎が上がる日も近い。

地元の土石は町の宝 ―― 古きを尊ぶ ネットワークを作りたい

本郷地区の中心である瀬戸町通り中ほどに「窯の美里いわたて」の粋な建物がある。1階は本郷焼全窯元の共販所、2階は農家レストラン。会津本郷焼事業協同組合の事務局も併設されている。事務局長の長谷川文夫さん（62歳）はここの主だ。

現在、組合加盟の窯元は14。世代交代や、新しい人の参入もあるが、その推移はさほど大きくない。製造・出荷高も横ばい。ほとんどは家内労働で、電化・ガス化・機械化が進み弟子や雑用係（例えば薪割り）が不要となっているという。「多くの窯の燃料はガスだ」と聞き、登り窯の燃料となる松の薪がしっかりと積まれていた、宗像家の庇下の情景を思い出した。

今や釉薬は容易に手に入り、窯ごとに多彩な色を出している。長谷川さんに本郷焼の特徴を尋ねると、「陶器も磁器もどちらも焼いていること。ひと言で言えばどうなのか？ と客に問われると返事に困る」と苦笑いされた。

会津本郷で350年を越えて焼き物が続いてきたのは、いくつもの歴史的、風土的理由がある。しかし、最も基礎的な理由は「良い原料となる土や石があったことだ」と強調された。早速、その現場に案内していただいた。積雪のため遠望に留まったが、採石場は丘陵地にあり、広い範囲に地肌が茶色くむき出していた。碍子（電気の絶縁器具）の製造会社と磁器窯元との共同使用だ。一方、陶器の採土場は、宗像窯に近い向羽黒山にある。

長谷川さんの願いは古き良き伝承の生きる3者の連携を図ること。3者とは車で南へ30分の宿場街道として人気高い「大内宿」、北東は若松方面の「会津塗器」、双方をつなぐ「会津本郷焼」。頑固で一途で粘り強いとされる会津気質ゆえ、願いはやがて実を結ぶことだろう。

宿にも会津の心ばえ

宿（吉田屋）の部屋に通された私は、軽い気持ちで「BS放送は観られますか？」と言ってしまった。テレビの受信機の調子が悪く、すぐには観られないとのこと。私の言葉を聞いたご亭主は、ただ黙々と配線やリモコンを調整し始めた。外部とも連絡をとりながら1時間。ついにBSを受信した。私が取材で訪れたことを知ると、女将が多忙の中、酒器など数々の本郷焼を並べて食卓を飾ってくれた。さりげなく、思いやり深く。会津の心ばえに触れ、じんわりと心が温まる思いだった。

それはサービスなどという浅薄な言葉はそぐわない。お二人の純朴な応接には、本郷焼の窯元や事務局にも共通する他者との共鳴・共感を呼ぶ心根を感じられた。会津地方も会津美里町も、凛とした自立の途を歩んでほしい。

【取材・文：坂根千代忠】

常勝寺境内にあって陶祖と磁祖とを祀る陶祖廟

会津本郷焼事業協同組合の事務局長・長谷川文夫さん

磁器と同じ石を原料とした地元の会社の製品である碍子

地区内の水車。かつて焼き物の原料の土石を砕いた。昔をしのんで今も回っている

Walk Repo 水源の里

豊かな自然の中で営まれる「水源の里」の暮らし。
そこには、都会には無い魅力があふれています。
その一方で、都市部では想像もできない厳しい現実や苦労があります。
このコーナーでは、そうした「水源の里」ならではの課題や
活性化への取り組みにスポットを当ててレポートします。

ウォーク ルポ

ぶどうのまちの新しい魅力
フットパスとかつぬま朝市を体験　山梨県 甲州市

勝沼の町なみ

甲州市はこんなまち

2005年11月、塩山市、勝沼町、大和村が合併して発足。人口34,700人、面積264 km²。ぶどうを中心とした、果樹栽培の盛んな地域。武田家ゆかりの神社仏閣が数多くある。都心から車で1時間半というアクセスの良さも魅力。

ぶどうと風林火山のまち

甲州市は富士山の北側、甲府盆地の東部に位置している。日本を代表するぶどうとワインの産地で、「風林火山」で知られる戦国武将・武田信玄ゆかりの地だ。2005年に塩山市、勝沼町、大和村が合併して誕生した。市域の東北部には中里介山の小説で知られる「大菩薩峠」があり、東京都民の飲料水を供給する多摩川の源流でもある。また、朝市やフットパス※、ワインツーリズムなど地域住民が主体となった活動も盛んだ。記者は多彩な魅力があるこの地を10月上旬に訪ねた。京都から名神、東名、中央道を走り5時間余で勝沼インターに着いた。ぶどうとワインが全国的に知られる勝沼は、農地の8割（800ヘクタール）をぶどう畑が占めており、どこを走ってもたわわに実ったぶどうを見ることができる。

ぶどうの無料配布に長蛇の列

10月6日、1年の収穫を感謝する「ぶどう祭り」が勝沼中央公園で開催された。勝沼が1年で最も賑わいを見せる日だ。呼び物の無料配布された甲州ぶどうは2トン。2房ずつで約500グラムとして、4,000人余にプレゼントされた。ぶどうの早食い競争にワインの無料サービスと、日本一のぶどうどころならではの大イベントが開催されたこの日、まちは県内外からの車で溢れかえっていた。

※ フットパス（foot-path）
自然や歴史文化に親しむ散策道。イギリスで19世紀後半から始まった。甲州市ではフットパスの会を作り、8コースを設定。経由地での地域住民との交流がリピーターを生んでいる。健康や癒しなどウォーキングの効果に加え、地域の活性化にもつながる取り組みとして注目されている。

歩いて地域の魅力を発見するフットパス

甲州市では、イギリス発祥で近年は日本でも観光やまちづくりの側面から注目されている、フットパスの活動が盛んだ。市は「ある～くこうしゅう・歩いて発見果樹園交流のまち甲州市」をテーマに、ウォーキングのまちとして県内外にアピールしようと、ルートマップを作成。案内標識やＨＰを整備した。ルートは、3時間ほどで歴史を散策する「信玄の里コース」や「かつぬまぶどうの里コース」など8つ設定されている。どのコースもまちの歴史を研修したメンバーが案内してくれる。記者は「ワインの歴史コース」に同行した。道中、見事なぶどうを収獲していたのは、栽培歴60年の芹沢修（せりざわおさむ）さん。「甲州のぶどうは奈良時代から1300年の栽培の歴史がある。夏は暑くて少雨。昼と夜の寒暖差が大きく、傾斜地で水はけが良いこの地が、甲州を日本有数のぶどう産地にしてくれた」と説明してくれた。

コースの見どころを紹介するマップブック

収穫する芹沢さん

明治10年、2人の青年がワインの醸造技術を学びに渡仏した。2年後に帰国し、ワイン醸造を始めてから130年。勝沼は日本のワイン発祥地とされ、今も大小34のワイナリーが軒を連ねている。ワインの歴史コースでは、日本最初のワイン醸造会社跡、葡萄酒資料館、ワイナリーの地下貯蔵庫も見学できる。ぶどうの生産者と出会い、ワイナリーを見学し、歴史を学び、試飲もある。ワイン通になりそうだ。ワインと親しむ旅を実感できるウォーキングとなった。

大人気！　山間の縁側カフェ

フットパスで訪れる観光客を山間の地まで呼び込んでいるのが、勝沼の山間地・深沢地区にある「縁側カフェ」だ。明治36年にＪＲ中央線が開通。その際に造られたレンガ積みの大日影トンネル（約1,400m）が遊歩道となり、多くの観光客が訪れている。この近くに住む主婦の三枝貴久子（さいぐさきくこ）さんは、観光客を山間の集落まで呼び込めないかと、隣近所の主婦と知恵を絞った。出た結論は、甲州弁で「エーノメーノジンギ（家の前の仁義）」。江戸時代、甲州勝沼宿では訪れた人にお茶をふるまいもてなす習わしがあった。今もその精神は残っている。この心意気で客を迎えようと縁側カフェを始めたところ「こんな所にも人が住んでいるのか」と話題になった。最初はお茶と漬物だけ出していたが「ここでご飯が食べたい」と声があがった。昼食を出すと200人だったお客さんが次の年には500人に。そして、3年目には三枝さん宅だけでも1,000人のお客さんが詰めかけた。「一日に60人も来るんだから大変でした。家で食べるものまで出しちゃって」と笑う貴久子さん。今は予約制にして何とか対応しているそうだ。

取材した日は、渋谷からのリピーターを含めて10人が訪れていた。評判の料理は、地元食材を使った貴久子さんの手づくり。肉、魚料理は一切なく、野菜を基本とした15品で1,500円。本業は急勾配の畑13アールでぶどうを栽培する農家なので、「ぶどう酒」と呼ぶワインは自家製だ。ちなみに、この三枝家、京都・丹波の出身で平家の落ち武者の末えいとか。現在でもお月見など年間30を数える家に残る行事を忠実に守り続けている。落ち武者の話に料理の話、話題に事欠かない縁側カフェだった。

三枝貴久子さん

右：三枝さんの手料理
下：お客さんの質問に答える三枝さん

ワイナリーの駐車場に
所狭しとテントが並ぶ

マンドリンの生演奏

定着した、かつぬま朝市

勝沼でもう一つの話題といえば、「かつぬま朝市」。平成15年に4人の有志で野菜の市を開いたのが始まり。毎月第1日曜日の午前中、ワイナリーの駐車場を借りて開催している。組織に母体は無く、ボランティアだけで運営しているのが特徴だ。「ここにしかないものを！　地元のいいものがいっぱい！ ぶどうとワインだけじゃない、かつぬま朝市」を合言葉に10月の開催で99回目を迎えた。朝市の成功の秘訣を尋ねると「朝市の固定観念を捨てたことだ」と、かつぬま朝市会副会長の小澤正光（おざわまさみつ）さんは話す。ここから企業家も数多く生まれたとか。ドタキャン、遅刻、早退ＯＫ。簡単な登録で出店できるのも魅力のひとつだとか。

バイクを販売する店舗

「勝沼フットパスの会」会長の
小澤正光さん

「かつぬま朝市会」会長の
髙安一さん

この日は朝方の雨にもかかわらず出店数180余り。新規の出店はキャンセル待ちとなるほどの人気だ。勝沼以外の地域からの出店が圧倒的に多く、地元は15店舗のみという。朝市を一回りして、農作物の店が少ないことに気がついた。工芸品から食料品、衣料、盆栽、バイクも売っている。新車もこれまで3台売れたそうだ。自転車にスピーカーを付けてマンドリンを奏でる人もいた。明らかに通常の朝市とは違う。バザール、展示会場、祭りの雰囲気なのだ。「この場で出店者が一番いいパフォーマンスが出来るよう、サポートを心がけている」と、会長の髙安一（たかやすはじめ）さん。「今後は若者を呼び込んで続けていきたい」と課題も見据えていた。

取材に先立ち、首都圏に近い甲州市が地域をどのようにクローズアップしているのかと、「ぶどう」「朝市」のキーワードを頭に入れて訪れた。360度ぶどう畑に囲まれた小高い丘は「ぶどうの丘」と呼ばれ、ワインの貯蔵庫や売店、レストラン、宿泊施設もある。ＪＲの駅名は「勝沼ぶどう郷駅」、学校の校舎にはぶどうのレリーフが掲げられ、このまちがぶどうと共にあることを実感した。そして、盛大な朝市。県内はもちろん関東や遠くは岐阜、浜松からも集まる出店者と、何かを求めて来場するお客さん。朝市は出店者にとっては展示の場であり、客はそれを見て楽しんでいた。「地域振興」というよりも「地域の行事」ととらえたほうが良さそうだ。朝市の開催日には、会場を出発点としたフットパスのガイドツアーも開催されている。こんな連携の良さが人と場所をつなぎ、いっそうまちを活気づけているのだろう。　【取材・文:岩岡 廣之】

水源の里発

おすすめご当地グルメ

一度食べると忘れられない味わいに、全国からのリピーター客も多い。

柿の葉寿司

（9個詰め合わせ）1,120円～

和歌山県九度山（くどやま）町

世界遺産の高野山町石道（ちょういしみち）や戦国の武将真田幸村親子ゆかりの真田庵に象徴される歴史と、玉川峡をはじめとする美しい自然に恵まれた九度山町。秋には特産品である「日本一の富有柿（ふゆうがき）」の収穫で賑わうこの町で、祭りにかかせないご馳走として古くから親しまれてきた郷土料理が「柿の葉寿司」。高野山を参詣する人々のお弁当としても人気の逸品です。

昔ながらの手作りの味を守り、一つひとつ丁寧に作られる商品は、県推薦の優良土産品にも指定されています。

「柿の葉寿司」とは、一口大の酢飯に魚の切り身などを乗せ、柿の葉で包んだ押し寿司のこと。殺菌効果があると言われる柿の葉で包むことで数日間の保存が可能となり、風味と薬効の相互作用に先人の知恵と工夫を感じます。寿司ネタは地域によって様々ですが、今回ご紹介する九和楽さんではサバ、サケ、シイタケの3種類です。

折を開くと、柿の葉独特の良い香りがふんわり漂います。美しく並ぶお寿司ですが、どれが何のネタだか分かりません。実はこれも柿の葉寿司ならではの演出！　包みを開くまでネタが何か分からないというワクワク感も、楽しみのひとつなのです。また開いた柿の葉を懐紙（お皿）代わりにして、手で持って食べるのが習わしだそう。

「何がでるかな～？」包みを開くと、まずはサバ。青魚特有の臭みがなく、適度な弾力のあるしっとりしたシャリとの相性が抜群。甘味と酸味と塩気がバランス良くマッチしてとっても上品な味わい。食べやすいサイズも後を引き、続いて二つ目。おっと、またサバ……そっと包みを戻します（笑）。二つ目はシイタケ。濃いめの甘辛い味付けが、懐かしいおばあちゃんのお煮付けを思い出させるホッとする美味しさ。最後はサケ。ネタ自体が上質で締め具合も丁度よく、これまたウマイ！　主食にはもちろん、日本酒の肴にも合います♡

【取材・文：白波瀬聡美】

【お問い合わせ】

柿の葉寿司
九和楽（くわらく）

〒648-0101
和歌山県伊都郡九度山町九度山1353
TEL・FAX
0736-54-2600
営業時間
8：00～18：00
定休日　不定休
http://www.kuwaraku.jp/

水源の里発

おすすめご当地グルメ

チーズ饅頭

（1個） 120円

宮崎県小林（こばやし）市

小林市は宮崎県の南西部、南九州のほぼ中央部に位置し、北は熊本県、南は鹿児島県に接しています。北部から南西部にかけて連なる九州山地、霧島山系に囲まれた地形から、昼夜の気温差や夏と冬の寒暖差が大きく、温暖な宮崎にありながら降雪が見られる珍しい市でもあります。そして小林市こそ、宮崎を代表する郷土菓子「チーズ饅頭」発祥の地。今や全国区の大人気スイーツです。

その人気ゆえ、宮崎には「チーズ饅頭」を作る菓子店がおよそ250もあり、中でも元祖との呼び声高いお店が南国屋今門（なんごくやいまかど）。30年ほど前に社長の今門政人さんが、饅頭のあんこに変わる物としてクリームチーズに着目し、試行錯誤の末に誕生したのが始まりだそう。宮崎に来られたCA（客室乗務員）さんたちのお土産として人気を博したことから、その美味しさが全国へ広がったとも言われています。

現在、南国屋にあるチーズ饅頭は、プレーン・くるみ・抹茶・チョコの4種類。まずは元祖と言われるレーズン入りのプレーンを一口。サックリとした歯触りの皮は、ほんのり自然な甘さ。中のチーズは、チーズ饅頭用に熟成・発酵させた植物性のものを使用。クリーミーで濃厚ながら、甘すぎないのであっさりとした口当たり。甘酸っぱいレーズンが爽やかなアクセントとなり、まろやかなチーズのコクを引き立てます。2～3日寝かせてしっとりした生地の饅頭もまたグッド！「饅頭と言えばあんこ」という既成概念を覆す「コラボレーションの妙」。若者人気も頷ける新感覚スイーツです。

【取材・文：白波瀬聡美】

4種類のチーズ饅頭は、それぞれに創意工夫を感じる素材の組み合わせで、どの味もチーズと絶妙にマッチして美味しい。

多い時で1日3000個のチーズ饅頭を売り上げるという「南国屋今門」。全国からのお取り寄せもでき、冷凍すると長期保存も可能です。

【お問い合わせ】

チーズ饅頭本舗
（有）南国屋今門
〒886-0008
宮崎県小林市本町67
TEL・FAX
0984-22-3074
フリーダイヤル
0120-22-3074
営業時間
8：30～21：30
土・日・祝日～22：00
定休日　なし

協議会だより

トピックス

第6期は163市町村でスタート

新たに、福島県昭和村、宮崎県延岡市に参画いただきました。協議会では、組織の拡大に向け多くの市町村の参画をお待ちしております。

全国水源の里基金の募金にご協力を

全国水源の里連絡協議会では、全国の会員市町村に募金箱を設置しています。水源の里を守り、豊かな環境を次の世代に引き継いでいくため、ぜひ募金にご協力ください。

編集部より

読者アンケート＆プレゼント

『水の源』では、今後の誌面づくり充実のため、読者アンケートを実施しています。アンケートにお答えいただいた皆様のなかから、おすすめご当地グルメのコーナーで紹介しました「柿の葉寿司」か「チーズ饅頭」を各2名様にプレゼントします（賞品の指定はできません）。

はがきに、①面白かった記事、②今後取り上げてほしい内容、③水源の里への思いなど、あなたのご意見・ご感想、住所、氏名、電話番号、性別を明記の上、下記宛先『水の源20号』読者アンケート係までご応募ください。

【平成25年3月29日（金）消印有効】

※当選者の発表は賞品の発送をもってかえさせていただきます。
※ご応募いただいた皆様の個人情報は、賞品発送以外の目的では使用しません。

『水の源』定期購読者募集

本誌を定期購読していただける方を募集しています。
年間購読料：1,000円（年4回発行）
お申し込み：下記連絡先、『水の源』定期購読係まで

お便り紹介

読者アンケート＆プレゼントへのご応募、誠にありがとうございます。
編集部に寄せられた「水源の里への思い」を紹介します。

18号ウォークルポ　合併の大波を泳ぎ切れ！「わいわいkiki」の挑戦（徳島県美波町）を読んで（奈良県・Wさん）

「住民が地域を元気にする」というキャッチフレーズがすばらしい。こんな考えを持っている温かい方がもっと増えていくと良いなと思いました。わいわい市場にも行ってみたいです。

19号ウォークルポ　まちのキャッチフレーズは「ないものはない」（島根県海士町）を読んで（福島県・Sさん）

島根県隠岐郡海士町のIターンの多さに驚いています。幅広い分野の方々の活躍の成果が目に浮かぶようです。

その他のご意見

（京都府・Sさん）

安らぎ、温もり、癒し。人間が生きていくために必要なものが水源の里にはあります。守らないといけませんね。

（長野県・Tさん）

ほのぼのとした日本らしい文化、自然、風景、生活など、読み終える頃にはのんびり、ゆったりとした満ち足りた気持ちになります。後世に残していきたいもの、大切にしたいものなど、記事の着眼点が好きです。今後も楽しみにしています。

お問い合わせ、ご連絡先は

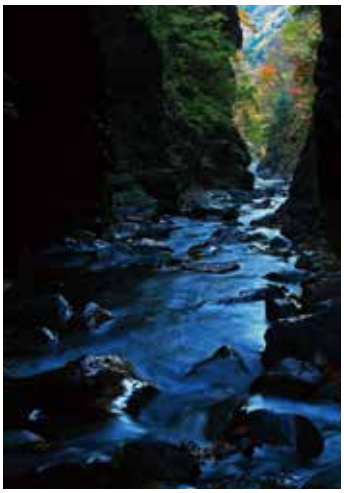
全国水源の里連絡協議会　事務局
綾部市役所　定住交流部　水源の里・地域振興課（上林いきいきセンター）
住所：〒623-1122　京都府綾部市八津合町上荒木5番地
TEL：0773-54-0095　FAX：0773-54-0096
E-mail：suigen@city.ayabe.lg.jp　http://www.suigennosato.com/index.htm

第4回 全国水源の里フォトコンテスト特選作品

『秘境に流る』
群馬県みなかみ町
磯 敏且さん(群馬県みなかみ町)

『里山の棚田』
岐阜県恵那市
青木 孝義さん(岐阜県中津川市)

『痛 快』
愛媛県宇和島市
薬師寺 孝男さん
(愛媛県鬼北町)



『秋 渓』
山梨県丹波山村
鈴木 秀樹さん(神奈川県川崎市)

『オハグロトンボの世界』滋賀県米原市
芝原 康夫さん(京都府京都市)

『秋 流』長野県王滝村
柳沢 勝彦さん(長野県小諸市)

『水の恵みに感謝』兵庫県丹波市
細谷 昭二郎さん(兵庫県丹波市)

『乙女の祈り』岐阜県飛騨市
薄井 溢夫さん(静岡県静岡市)

『降 臨』福島県猪苗代町
浅野 良さん(福島県福島市)

『浅春の朝』山形県飯豊町
齋藤 徹さん(山形県飯豊町)

水の源　第20号
企画・発行：全国水源の里連絡協議会
発行日：平成25年2月
編　集：「水の源」編集委員会

私たちは水源の里を応援します!!

全国環境整備事業協同組合連合会
全国農業協同組合連合会
全国森林組合連合会
電気事業連合会
独立行政法人 水資源機構
社団法人 全国浄化槽団体連合会
一般社団法人 全国清涼飲料工業会
公益社団法人 大分県薬剤師会